二本松城

二本松城は、1414 年から 1868 年まで現在の霞ヶ城公園の場所にありました。この城は、戦国時代（1467~1568）を通じて何人かの大名によって住まわれ、1643 年に新しく設立された二本松藩の初代大名である丹羽光重に与えられました。光重とその子孫は 1868 年までこの城で統治しましたが、城は 1868 年に徳川幕府とそれを打倒することを決意した有力藩連合との間で戦われた戊辰戦争で破壊されました。

山岳要塞から近代都市へ

二本松城は、戦国時代に高台の防御しやすい場所に築かれた多くの「山城」の 1 つでしたが、より平和となった徳川幕府（1603~1868）の時代には、ほとんどの大名が低地の便利な家に移転しました。しかし、丹羽氏は住まいと行政施設を元の城壁の中に残しました。そのため、平らなスペースが不足し、複数の階層に建物を建てるなど、いくつかの特異なレイアウト決定が必要になりました。

丹羽光重は都市計画が藩の強さの鍵であると考え、都市計画に強い関心を持ちました。彼は城壁の外側の集落を町に再編しましたが、その基本的な配置は今日の二本松市にも見ることができます。彼はまた、約 18 キロメートル離れた山中の水源から城と城下町に欠かせない水をもたらす一連の水路とパイプである二合田用水路の建設も命じました。

霞ヶ城公園の誕生

戊辰戦争後、二本松城跡は製糸工場となった後、霞ヶ城公園と改名され、花や木々が植えられ市民の憩いの場となりました。公園には保存および復元された石垣や建物、庭園があり、過去の二本松城の姿を明らかにしています。

この公園で最も高いところにあるのが、城の中で最初に完成した部分、本丸です。本丸の周囲は石垣に囲まれており、その石垣の一部は 16 世紀後半に築かれました。本丸内の天守台には実際の天守閣があったことはないものの、ここからは二本松周辺の土地を一望できます。公園の下方には、敷地内に現存する最古の建造物である洗心亭のほか、再現された箕輪門や 17 世紀半ばにつくられた日本庭園もあります。

二本松市の中核

二本松城跡は、地元の園芸家が特別に栽培した花で覆われた人形を展示する菊祭りの会場となるなど、今でも二本松の市民生活に重要な役割を果たしています。箕輪門は提灯祭りの最後の夜に市の各地域の人々が、祭囃子が響く中、提灯で覆われた背の高い太鼓台を市中へ送り出す「三町合同曳き廻し」の出発地点です。

丹羽光重は彼の時代から何世紀も経ってこの地域がどのように発展するかは予見できなかったでしょうが、現在の二本松の基礎は彼の都市計画によって築かれ、二本松城跡は今でもその中心にあります。